

(有)静岡健康企画 ことぶき薬局 TEL055(977)6024 たまち薬局 TEL054(251)1678
ひまわり薬局 TEL053(463)4312 みかん薬局 TEL053(584)2230

コンビニで薬が買える?!

医薬品の販売規制緩和として、すでにコンビニやスーパーで、1999年3月末から栄養ドリンクなどが売られています。今度は、一般用医薬品まで、薬剤師のいない一般の店でも売ってもよいと、6月の経済財政諮問会議で決まりました。

ドリンク剤のときと同じようにいくつかの品目を、薬局薬店でしか売ってはいけない「医薬品」の枠から「医薬部外品」の枠に移して売るのが、医薬品のまま販売するのか、くわしいことは年末には決まるといわれています。(いつでも元気 2003.11 より)

皆さんが薬を手に入れるには大きく分けて3つの方法があります。

医療用医薬品

病院などで医師の診断のもと、治療のために処方してもらう薬です。薬剤師は医師の処方箋に従って調剤し、薬の飲み合わせや起こり得る副作用等を説明し、確認をして患者様にお渡しします。



薬を調合する道具(乳鉢、乳棒)

一般医薬品(市販薬 または 大衆薬)

自分で薬局・薬店などに行って購入する薬です。医療用医薬品は1つの効果に対して1つの薬剤が使われる場合が多く、効果が強い反面、副作用などに注意する必要があります。

一方、一般医薬品は効果は弱いのですが、1つの薬剤で広い効果が期待できるものが多いです。利用者が自分で自分の症状を十分把握した上で、病院にかからず自由に入手できる医薬品、それが一般医薬品です。しかし、一般用医薬品といえども副作用はありますのでドラッグストアでも薬剤師が対応しています。

配置薬(置き薬)

自宅に薬箱を置かせていただき定期的に年に数回訪問した際、使用した分だけ料金を頂くとという日本独自のシステムです。専門知識のある配置員(身分証明書有り)が担当していますが、薬剤師は殆ど関わっていません。



【情勢の問題点】

医薬品販売の規制緩和について、「賛成」「反対」と様々な意見があり、現在、厚生労働省では「安全上特に問題のないものの選定」ということで作業を進めています。しかしながら、実際安全性の問題はどうでしょうか？ 薬は「毒を以って毒を制す」とも言われます。本当に安全で心配のないクスリなどあるのでしょうか？また、今回の医薬品の規制緩和をもとに、保険対象薬品が減少し、「貼り薬やビタミン剤は、一般医薬品として購入できる為保険が使えませんコンビニで購入ください」となる事も考えられます。これは、日本が世界に誇る国民皆保険制度が崩されてしまう始まりかもしれません……。これからも我々薬剤師・薬局職員は、クスリと健康について取り組んでまいりますので、ご心配な点はお気軽にご相談ください。

私ども薬剤師はそんな薬を安全安心に皆様に提供する事が仕事なのです。

インフルエンザと治療薬

1 1月号ではインフルエンザのワクチンのお話をしましたが今月号ではインフルエンザとその治療薬についてお話したいと思います。

1、 インフルエンザと風邪の違いは？

インフルエンザは風邪の一種と思われがちですが、いわゆる普通の風邪（普通感冒）とは全く異なります。インフルエンザの原因はインフルエンザウイルスで急激な発熱（38～40の高熱）、倦怠感、関節痛、頭痛などの全身症状がまず現われ、やや遅れて咽頭痛、咳、鼻汁などの上気道症状がみられます。目の充血や流涙も特徴の1つです。倦怠感などの症状が長期化したり気管支炎や肺炎などを併発して重症化する危険性もあり、特に抵抗力の弱い高齢者や乳幼児では注意が必要です。

2、 治療薬にはどのようなものがある？

現在はインフルエンザそのものの治療薬があります。

お薬の名前	剤形	有効なウイルスの型
シンメトレル	錠剤/細粒	A型のみ
リレンザ	吸入タイプ	A型とB型の両方
タミフル	カプセル/ドライシロップ	A型とB型の両方

これらはウイルスの増殖を抑制する作用があり、インフルエンザの症状を軽くしたり病気にかかっている期間を短くし、悪化するのを防ぐなどの効果が期待できると言われています。1日2回で5日以内の短期間使用します。

3、 治療薬使用時のポイントは？

これらのお薬はウイルスの増殖を抑えることが目的です。そのためには感染後または症状が現われてからできるだけ早く（症状発現後48時間以内）使用することが重要です。インフルエンザかなと思ったら早めの受診をお勧めします。

インフルエンザと解熱剤

インフルエンザにかかった場合、高熱が続くことがあります。そのような場合、解熱剤を使用することで発熱を抑えることができます。しかし一方で、発熱はウイルスから体を守ろうとする反応で過度に解熱剤を使用することでこの防御機構を抑制してしまうことにもなりかねません。また、大量に使用することで重大な副作用が現われることもあります。おおまかな使用の目安は38.5以上で持続的な解熱を得ることよりは発熱に伴う不快な症状（眠れない、消耗が激しい、水分や食事が取れない等）を改善することが目的と考えられています。また、体温には個人差があり38.5以下でもそれぞれの状態によっては解熱剤が必要な場合もあります。

インフルエンザにかかっている時に使用すると特に小児でインフルエンザ脳症やライ症候群といった病気の経過を悪化させたり発症率を高める解熱剤もあります。以前に処方された薬や市販の薬を自分の判断で使用せず医師、薬剤師に必ず相談するようにしましょう。

